

伊勢國の經塚

佐藤 虎雄

一 緒 言

我國佛教信仰の史蹟として、佛教史上には勿論のこと、考古學上にも將又廣く我國史の上にも重要な研究題目となつて居るものは經塚である。經塚は藤原時代から鎌倉時代にかけて、更に足利時代にも、僧俗の信者の寫經埋納によつて行はれ、我が内地殆んど全國に分布し、その遺蹟の發見されたるもの約三百を算してゐる。其の中に伊勢國に就いて見るに次の十ヶ所を算へる事が出来る。

宇治山田市浦口町且過山小町塚

度會郡 宮本村 大字勢田小字永代山經ヶ峰

同郡 同村 大字勢田小字八塚八塚山

同郡 同村 大字前山小字龜谷郷

同郡 四郷村 大字楠部

同郡 同村 大字朝熊小字岳經ヶ峰

同郡 同村 大字北中村小字菩提山

同郡 吉津村 大字河内 仙宮神社

一志郡 多氣村 大字漆 御壺山

安濃郡 神戸村 大字半田

桑名郡 多度村 大字多度 多度神社

以上大部分南伊勢が之を占め北伊勢には少い。南伊勢でも、神宮鎮座の宇治山田市を中心として之に隣接する地方に著しい。神風の伊勢宮は神宮奉齋の國であり、神宮祠官荒木田氏度會氏等の經塚を營むものあつて、當時の佛教信仰に注意すべき現象である。また經塚遺物にも瓦經・鏡・佛像・水滴・磬・鐙・槍等注意すべきもの少からず、考古學的にも研究を要するものである。

二 經塚の分布沿革

伊勢の經塚に關しては漸く徳川時代中期に知られ寛政

廣田周藏氏藏



1 青銅製經筒及其外容器(漆御壺山出土)

3 陶製經筒(前山龜谷郷出土)

世義寺藏



2 陶製經筒(朝熊山經ヶ峰出土)

金剛證寺藏

第四圖

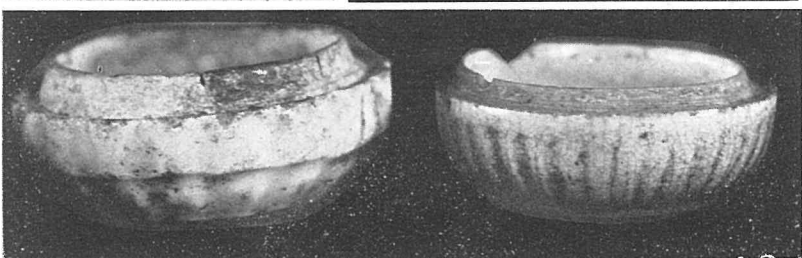
伊勢國發見 經塚遺物

1 卍字集瓦經 (宇治山田市且過山出土)



神宮文庫藏

2 青白磁合子 (漆御壺山出土)



3 刀及鏝 (漆御壺山出土)



廣田周藏氏藏

4 青銅鍍金水滴 仙宮神社藏

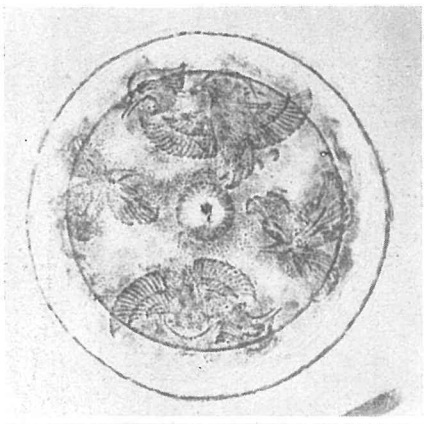


廣田周藏氏藏

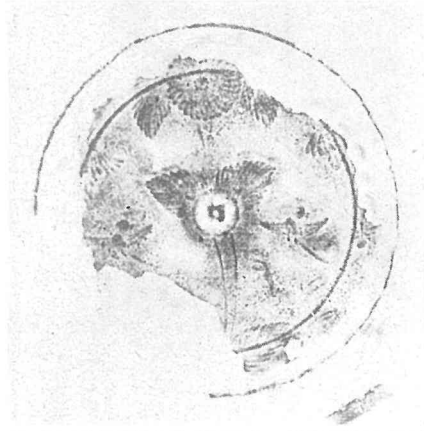
第五圖

伊勢國漆御靈山 經塚 鏡拓影 其一

4 鴛鴦草葉鏡



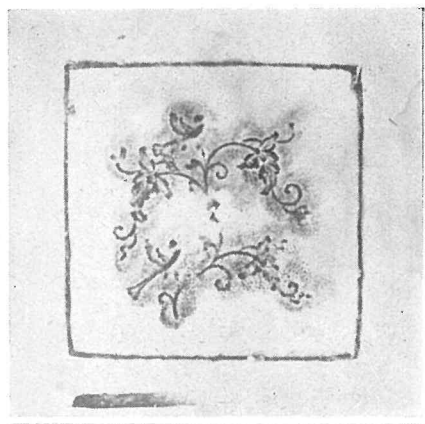
5 菊花飛雀鏡



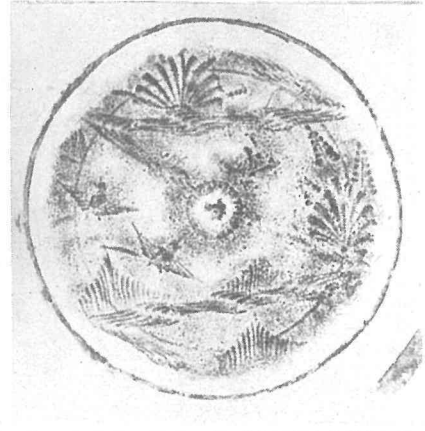
6 松藤散及鶴鏡



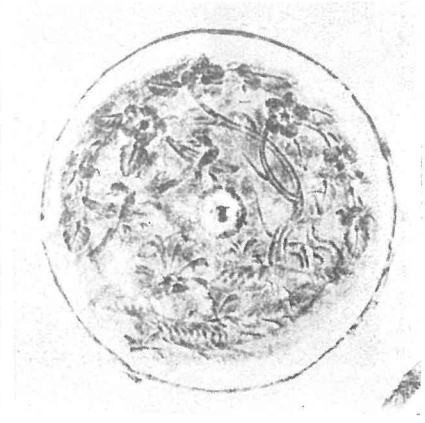
1 唐草飛雀鏡



2 水草飛雀鏡



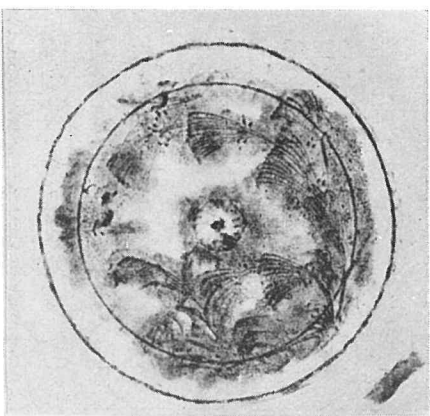
3 山吹飛雀鏡



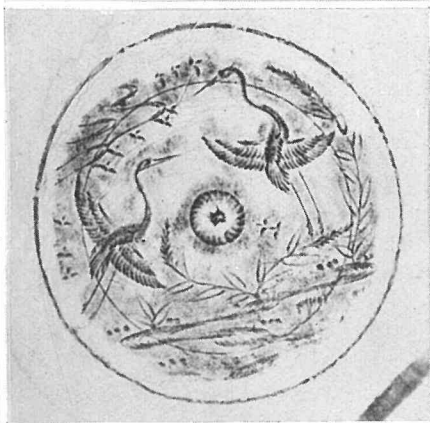
第六圖

伊勢國漆御壺山經塚鏡拓影 其一

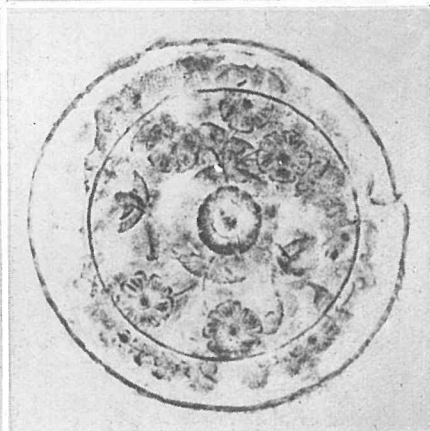
1 秋草飛雀鏡



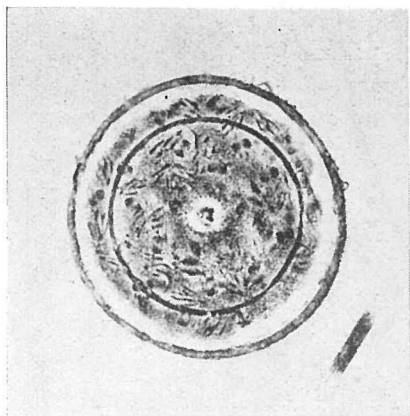
2 蘆生飛鶴鏡



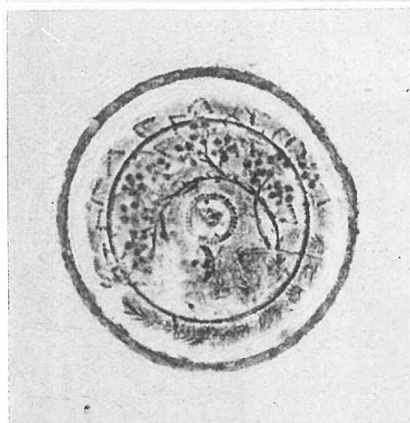
6 湖州鏡



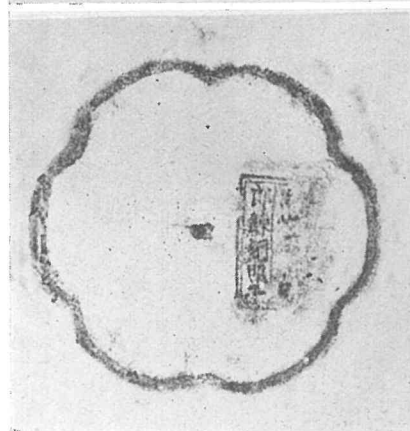
4 橘枝双雀鏡



5 櫻樹飛雀鏡



6 湖州鏡



九年の伊勢參宮名所圖會、天保四年安岡親毅撰の勢陽五鈴遺響、明治二十八年神宮司廳編の神都名勝誌に記載せられてゐる。近年は考古界考古學雜誌等にも多少は紹介せられてゐる。此等の經塚は自然の崩壞若くは人爲的の發掘によつて遺物を出してゐる。茲に經塚發見・發掘の顛末及び現狀に就いて今回調査したところを概略説明する。

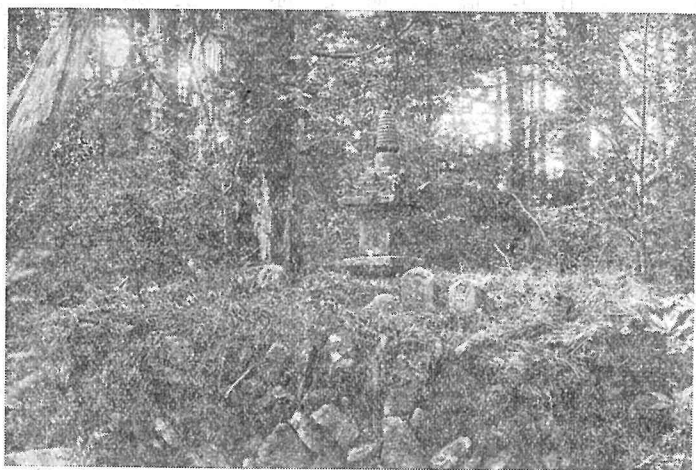
宇治山田市、外宮の背後高倉山・蓮隨山より北方へ、浦口町字山名に丘陵がのびて且過山と云ひ、其丘尾を天神山といふ。今且過山と天神山との間には伊勢電鐵を通じてゐる。兩山共に往古よりの墓地で度會氏荒木田氏の墓もある。且過山中に唐谷と稱する所があつて、天明年中に耘耨する農夫が一堆の地を穿つたのに數百枚の經瓦を得たといふ。其後明治の中頃にも且過山の小町塚と稱する所より多數の經瓦を發掘したと云ふ。その遺蹟をみるに現狀は草木叢生して特別なる施設は分らない。而して世に天神山或は且過山の經塚と稱するものは何れも、この小町塚の遺蹟を指すに外ならない。

度會郡では宮本村大字勢田小字永代山の丘陵地で宇治山田市倭町に接する邊に經ヶ峰があつて頗る小區域ではあるが、封土がよく残り數株の松樹が聳えて居る。封土の中央部に掘られた跡があり、土中小石の礫々たるが認められ、調査の際に皿形素焼土器の破片を發見した。此の經ヶ峰より永代山を西南へ下つて、勢田小字八塚に出る。此處の八塚山より明治初年の頃に經卷の入つた陶製經筒二個を發見したといふ。此地點も今明でない。宮本村大字前山字龜谷郷は嘗て世義寺のあつた舊地であるが寺の宇治山田へ移轉の際に經筒二個を發見したといふ。現に龜谷郷の山上には世義寺の古瓦を含んだ遺趾はあるが經塚の地點は確實に分らない。

宇治山田市の東方なる四郷村に於ては大字楠部より明治三十八年に耕地整理中に經石一千五百個在中の一個の壺を發見した。同村大字北中村なる菩提山は神宮寺のあつた所で此處よりも瓦經が發見された、現在草木叢生して大いに荒廢してゐる。同村大字朝熊小字岳なる朝熊山は南北二峰に分れ、その南なるを經ヶ峰と云ひ、金剛證

寺の背面に當り海拔五百五十三米の所である。此處には經塚が鼎の脚の如く數間離れて

三基あつて、第一號は明治十五年頃塚畔の樹木が倒れて、經筒が露出した。其後經筒破片、合子等が發掘された。此經塚營造當初は他の一般例と同じく小墳丘状態を呈した封土が存したものでらしい。大正三年夏修繕を加へて現状の如く高さ約半間徑約一間半の圓形に石を積み寶篋印石塔が立つて、經塚の標識となつてゐる。(第一圖)第二號は明治三十四五年頃何者にか發掘せられ、それを修繕の際に經筒破片佛像銅板等を出した。現に方約七尺五寸高さ約一尺の壇をなし五輪石塔が立つてゐる。第三號も何時の頃か盜掘される。



第一圖 伊勢國朝熊山ヶ峰第一號經塚

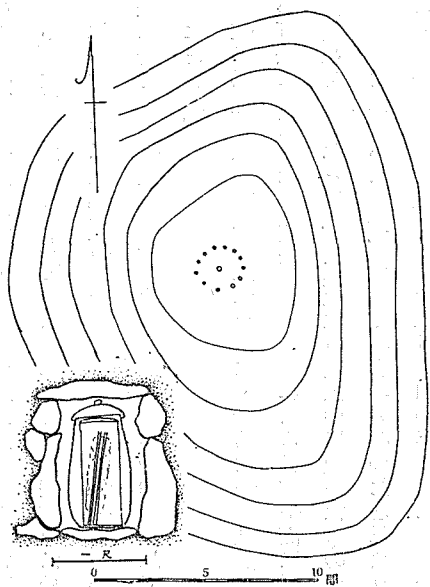
石塔二基が立つてゐる。

一志郡では多氣村宇漆に御壺山の經塚があつて昭和九年二月に經筒・鏡・合子・刀・槍等多數の遺物を發掘した。安濃郡では神戸村大字半田より多數の經石を發見した。

なほ度會郡吉津村大字河内なる仙宮神社には經筒・水滴・磬を傳へてゐるが、此等は土中品で境内發掘品の陶器土器等から推して伴出したものであらう。多氣郡丹生村なる神宮寺には優秀なる經筒が傳つてゐる。其の發見地は不詳であるが、其銘文によつて伊勢國であらうと認めら

桑名郡多度村なる多度神社境内には岩石多く明和七年社の側の籠石の下より鏡三十面、劔一口、陶器十五個、錢一文を發掘した。其の後經筒の殘缺を發掘し、此の遺蹟は確實に經塚といふことが認められた。

以上の中で現在經塚としての面影を残して居るのは宮本村永代山の經ヶ峰・朝熊山の經ヶ峰・多氣村漆の御壺山で其他は甚しき變遷を來してゐる。



(廣田周藏氏見取圖に據る)

第二圖 御壺山經塚平面圖及中央經筒埋納狀態

伊勢國の經塚

三 經塚の構造

伊勢國經塚の構造に關しては既に破壞埋滅に歸したものが多く、殊に内部構造に至つては今日之を適確に明記することは至難である。

永代山の經ヶ峰朝熊山の經ヶ峰、多氣村漆、多度神社等に於ては封土は割合によく残つてゐる。朝熊山に於ては割石が堆積し、第一號經塚では、既に國寶に指定せられた陶製經筒は小石室内に納められ、天井には加工せる石材二枚を以て覆つてあつたといふ。漆經塚は御壺山の頂上で、發掘者の言によると地下約六尺にして遺物の壙室が現れ、中央に陶製外容器付青銅經筒一個あり、之を中心として約三間の直徑を以て十三個の經筒が環狀に配置してあつた。(第二圖) 其中の一個は既に盜掘にあひ破壞されてゐた。各經筒はその下に扁平な底石があつて周圍を割石で圍み上には天井石が覆ふてあつたといふ。此石室は漸く經筒を容るゝに足るの大ききで、内部に鏡・刀・合子・錢が納められてあつた。此の如く小石室を形成することは藤原時代經塚に類例の多いものである。一封土中

に此の如く環狀に經筒の配置されたるは、その例至つて少く、伊豆國伊豆山神社の經塚に此形式があると聞いてゐる。なほ此が参考として筑前國四王寺山經塚群中に於ては一封土中に三個の石室を藏し、駿河國沼津香貫山經塚に於ては中央主室の外、その四方に遺物が納置されてゐたといふ。

次に瓦經經塚の内部構造は更によく分らない。且過山小町塚に於ては明治年代發掘者の談によるに、平面に數枚重ねてあつたといふ。瓦經は直接土中に埋めたものか伊勢國では分らないが、他國では容器のあつたと思はれるものがある。唯注意すべきは且過山の出土品に土製素燒の反轉した蓮瓣形があつて、此は經塚の内部に或區劃をなしてその内に瓦經が納められたものと思はれる。

伊勢國の經塚は計劃的に發掘調査したものはない。經塚附近の天然の崩壞或は人爲的の發掘削除に附隨して、或は單なる遺物採取の目的によつて發見せられたものが多い。従つて内部の構造大きな遺物の埋納状態等の如きは明瞭を缺いてゐる。かくて出土遺物の如きも完全に收

納せられた場合は極めて少いのである。

四 經文遺物

伊勢國經塚發見の經文には紙本經・瓦經・石經の三種類ある。

紙本經の確實に遺つて居たのは宮本村八塚山の經塚で明治初年に經筒中に發見されたものがあるが、今その所在不明である。多氣村漆の經塚では、その紙が腐朽して墨書の文字ではあるが判讀し難い。併し、經卷の軸をなしてゐた竹が十數本遺つてゐた。吉津村河内の仙宮神社の銅製寶幢形經筒には墨書細字の法華經八卷が遺つて居る但し此は近世の筆である。此外の經塚に於ては紙本經の有無は明でないが、經筒が出てゐる以上はその中には經卷のあつたことは想像される。

次に瓦經であるが之は且過山小町塚・北中村菩提山にて夥しく發見され伊勢國として著名なるものである。此等經塚の瓦經は大體相似たる形式で土製素燒で灰白色若くは黝黑色を呈し且吸水性に富んでゐる。一枚の大きさは縦約八寸乃至八寸四分・横約九寸六分乃至一尺・厚さ六分

乃至七分である。播磨國^⑮より發見されたものは縦九寸・横八寸六分・厚五分で伊勢國の方が少し大きい。兩面に野を引き、一面十五行で各行の高さ七寸・幅六分ある。此行に經文を刻し、一行十七字詰であるが、經文の都合によつては十八字・二十四字・三十二字詰のものもある。播磨^⑯出土のものは十二行乃至十五行の野をひき、一行十二字乃至十七字詰である。經文の都合で表面で終つた場合は裏面には野も引いてない。

經の種類は法華經が最も多く、普賢觀經・無量義經・般若心經・大日經・金剛頂經・蘇悉地經・理趣經・隨求即得陀羅尼・金剛界禮讚文があり、金剛界曼荼羅・胎藏界曼荼羅まである。菩提山出土の瓦經には般若心經を小町塚の瓦經^⑰には金剛界曼荼羅、胎藏界曼荼羅を夫々記してあつた。經の文字は大部分漢字であるが、且過山出土の中には眞言宗の諸天の總種子なる呼(Hei)の梵字を並べ記したものがあつた。以て諸佛、諸菩薩を一字毎に表し、三世三千佛等の諸佛を標示したものである。(第四圖一)

瓦經の界線の左側に稀には右側に「六卷十八」と書いて

あるのは法華經六卷の十八枚目なるを示す。其他「大日二卷十一」「大日經四卷」「金剛禮讚」「金剛頂經下七」「蘇三卷卅一」「蘇悉十五」「蘇悉中十八」「理五」等と書いてあるが、かゝる略號は推して知るべきである。此等には承安四年の銘のあるものが多い。そして願文を書き添へてあるが且過山出土のものには筆者や瓦工の名の記されたものもある。又瓦經と同じ燒方で製られた土製素燒の光背形がある。某氏の藏に二個あるが高さ約八寸の二重圓光で其一は表に、ア、ビ、ラ、ウンケン^⑱の種子を書きめぐらし其二は表に眞言の種子をかきめぐらし裏に「過去大^⑲中臣氏蓮妙爲成佛得道也、承安四年五月二十一日作者僧隆圓□□實、沙彌參西」と銘があつて此の内容及書體から推して且過山か菩提山出土のものと思はれる。瓦經に准ずるものとしてあけておく。

瓦經は從來、山城・三河・播磨・備前・備後・美作・伯耆・阿波・筑前・筑後に亘り西國に多い様である。而して伊勢國に於ては其の種類多く、注目すべきものである。

五 經 筒

伊勢國に於ては經塚遺蹟の約半数より經筒を出して居る。經筒には陶土製と銅製とがあつて前者の方が多く、

現存して居るものに就いて其の發見地所藏大きさ等次の如し。

發見地所藏	身			蓋	備考			
	高	口徑	底徑					
宮本村前山	世義寺	八寸三	六・九	六・二	〇・三一〇・五	欠	有	銘(第三圖3)
同	同	八・〇	七・〇	五・九	〇・三一〇・五	欠	有	銘(第三圖2)
四鄉村朝熊	金剛證寺	一〇・七	五・〇	五・九	〇・三	欠	有	銘(第三圖1)
吉津村河内	仙宮神社	九・一	四・九	四・五	〇・三	一・五	十三個ノ内(第三圖1)	
多氣村漆	廣田周藏	七・二	四・四	三・八	〇・三	二・二	經筒外容器(第三圖1)	
同	同	九・一	五・〇	五・八	〇・三	一・八		
不明(推定朝熊山)	岩出齋三郎	九・七	五・七	五・一	〇・三	欠	有	銘

右表に見る如く身の高さに於て金剛證寺藏のものが一尺七分で最も高く漆經塚のが七寸二分で最も低いが大體八寸乃至一尺までのものが多い。口徑は四寸乃至七寸で世義寺藏のものが最も廣い。高さと同徑とは必ずしも正比例してゐない。形状は埴形で口より胴部に至り膨み再び底部に至るに従つて狭まつてゐる。漆經塚のものには胴部に突帯をめぐらしたものがあつた。口頸部は極めて短

く或は無いが、丹生村神宮寺藏のものは口頸部内繰りで匙面を呈し精巧なるものである。底は何れも平底の形式である。現に蓋を備へてゐるものは少く、たゞ漆經塚に於ては十四個何れも完備してゐたといふ。此等何れも仙宮神社、岩出氏所藏のものと共に被蓋式撮蓋の形式である。

陶土は細砂粒を含んだ粘土を用ひ素焼で吸水性のものと、焼成火度高く焼締めたものがある。表面は世義寺金剛證寺藏の如きは黝黒色を呈し、丹生村神宮寺藏の如きは焼締めの強い爲に濃黒色を呈して質は堅緻である。又世義寺藏のものには自然に釉の吹出してゐる部分がある。

此等經筒は世義寺、仙宮神社藏の身の内部を見ると幅約五分の輪積法を以て作られたことが認められる。世義寺藏のものは圓板狀の底を作つて之に圓筒を繼合せたことがよく分る。世義寺・金剛證寺藏のものは、その表面を篋で縦に削取つた痕がある。

世義寺・金剛證寺・神宮寺藏の經筒には何れも藤原時代の紀年銘があり、無銘のものとも雖も大體に之に類似し何れも藤原時代末期乃至は鎌倉時代の製作である。

次に青銅製經筒を見るに此が遺物は極めて少い。多氣村漆の經塚の中央部より陶製外容器に容れられ一個を發見した。(第三圖)此は打物製で身の高さ八寸三分、直径四寸二分、厚さ五厘の圓筒狀にして、平底系の被底であ

る。蓋は高さ八分の被蓋式で盛上り鈕はない。全體に綠青を生じてゐる。

吉津村河内の仙宮神社には銅製六角寶幢式の經筒が傳つてゐる。總高四寸六分・身の高さ三寸三分五厘、一邊九分の六角柱にして荷葉形の臺がついてゐる。蓋は高さ一寸四分にして寶珠・露盤・笠を備へ等は盛上げて端は六葉に反轉し、その先より理珞を垂れて以て裝飾としてある。身の正面には觀音像を毛彫にし、その下方に銘を刻してある。之が類例を求むるに越前國今立郡舟津村字長泉寺より發見されて、此には「奉納大乘妙典六十六部」と銘してある。この種寶幢形經筒は山城國鞍馬寺經塚より古式のものを出して居るが、通例室町時代以降の製作で矮小のものも多く形狀手法等優秀なるものは少い。之を要するに伊勢國經塚の經筒は陶土製のものが多く銅製のものは漆經塚出土と仙宮神社藏品とに過ぎず。以上經筒は仙宮神社の銅製品を除いて外は皆藤原時代乃至は鎌倉時代のものである。

六 經 塚 の 鏡

伊勢の經塚から鏡を出した例は少く、多氣村漆の經塚よりは十二面、多度神社の經塚より三十面を夫々出してゐる。漆の經塚に就いては未だ紹介されてないやうであるから次に概略する。此の十二面は一面だけが湖州鏡で、他は全部和式鏡である。成分は唐草双鳥方鏡と櫻樹飛雀鏡とが白銅製にして其他は青銅製である。何れも鮮に緑青が出て居る。

1 唐草雙鳥方鏡(第五圖1) 方二寸、縁は蒲鉾式にして高さ一分、鏡面殆んど平直である。背には極めて小さい素鈕があり、下方より鈕を貫いて上方に唐草の枝を表し、上下各の向つて左側に、向つて右向の尾長鳥を配してゐる。圖様は藤原時代流行の極めて簡頸なるもので十二面の中で最も優秀である。

2 水草飛雀鏡(第五圖2) 直徑三寸六分、縁は内傾式にして高さ二分二厘、背は花形座鈕に單圈をめぐらし、鈕の上下に流水を表し、それに菖蒲澤瀉を生ぜしめ向つて左方に一雙の飛雀を配してゐる。

3 山吹飛雀鏡(第五圖3) 直徑三寸四分五厘、縁は外

傾式にして高さ二分ある。背は花形座鈕の向つて右に山吹の木立を表し、その幹枝は婉曲に出來てゐる。山吹の花は五瓣の一重である。下方には下草を生ぜしめ、向つて左寄りに一雙の雀が後を顧みて飛んでゐる。

4 鴛鴦草葉鏡(第五圖4) 直徑三寸四分、縁高さ二分あり、背には單圈をめぐらし、花形座鈕の上下に一雙の左右に一對の鴛鴦を配してゐる。鴛鴦は互に向ひ會つて、兩翼を廣げ、その頭部は何れも圈の外側にはみ出してゐる。左右の草葉は三葉の形式である。

5 菊枝飛雀鏡(第五圖5) 直徑三寸六分、縁高さ一分八厘あつて一部分缺損して居る。背には單圈をめぐらし鈕を通して二本の菊枝を生ぜしめ、菊花の兩側に葉をつけ左右に飛雀が居る。

6 松藤散雙鶴鏡(第五圖6) 直徑三寸三分五厘、縁は内傾式で高さ二分一厘あり、背には單圈をめぐらし花形座鈕の上下に羽翼を擴けたる鶴を外向に配し、嘴は單圈をふくんでゐる。圈内には左右各三個の松葉を置き圏外には上下に藤花の房を延ばしてゐる。

7 秋草飛雀鏡(第六圖1) 直徑三寸四分、縁は外傾式にして高さ二分ある。背には單圈をめぐらし花形座鈕がある。下方より向つて右寄に尾花、女郎花等の秋草を生ぜしめ、風に吹かれて内側にたわんでゐる。そして向つて左方に雙雀が飛び秋の野邊の情趣を單純且微妙に表してゐる。

8 蘆生飛鶴鏡(第六圖2) 直徑三寸五分五厘、縁の高さ二分二厘あり、背には單圈をめぐらし、花形座鈕左右に飛鶴を配し、右方のは少しく高く互に向合つてゐる。下方には流水に穂のついた蘆を生ぜしめ、左上にも流水を表し、圖面によく生動の狀が漂つてゐる。

9 草花飛雀鏡(第六圖3) 直徑三寸五分、縁高さ二分で一部分缺損して居る。背には單圈をめぐらし、花形座鈕の上には二輪下には三輪の櫻草の如き草花を相對せしめ、左右には飛雀が居る。

10 橘枝双雀鏡(第六圖4) 直徑二寸六分五厘縁高一分六厘あり、背には單圈をめぐらし、一面に橘の實の着いた枝を散してある。此鏡は次に述べる櫻樹飛雀鏡と共に

縁及び單圈の幅稍廣く、又圖様より見ても藤原時代末期のものである。

11 櫻樹飛雀鏡(第六圖5) 直徑二寸九分、縁高二分二厘あり、背には單圈をめぐらし、花形座鈕をおく。右より上に櫻樹を立てまはし、その葉は連珠文式三角形にして多く圈外に出てゐる。下方に飛雀が居る。

12 湖州六花鏡(第六圖6) 六花形にして直徑三寸三分縁高六厘あり、背には鈕の向つて右に長方形輪廓があつて二行に「湖州□□□鍊銅照子」と銘がある。湖州鏡として普通の形式である。

次に吉津村の仙宮神社には藤原時代の山吹蝶鳥鏡(或は山吹雙雀鏡)の殘缺が傳つてゐるが、此は恐らく經筒と共に神社附近の經塚から掘出されたものであらう。

北勢に於ては多度神社に發掘鏡三十面を藏してゐるが此等は唐草雙鳥、草花雙鳥、秋草雙雀、草花蝶鳥、網鳥等の諸文で藤原時代末期乃至は鎌倉時代初期のもので優秀なるものとして既に國寶に指定されてゐる。なほ多度村大字柚井小字一ノ谷の丸山よりは開墾に際し八稜瑞花

雙鳥鏡を發掘した。

伊勢國では經塚並に此に類する遺蹟より鏡の發見は決して多いといふ程ではないが、漆や多度に於けるが如く一ヶ所に多數を出し、而も優秀なるものが多い。

七 其他の遺物

經塚遺物として上記の外に佛像及び合子・水滴・磬・錢貨・武器等の發物類がある。伊勢國で此等の種目を比較的多く出したのは吉津村仙宮神社及多氣村漆の經塚である。

佛像の多數發掘されたのは朝熊山の經ヶ峰第二號の經塚で、其は地藏菩薩の像である。土製素燒、赤褐色を呈し、前後半面つゝを製つて作合せたものである。像は高さ約四寸の立像で左手に寶珠・右手に錫杖を持つてゐる。なほ此佛像を出した經塚よりは永正紀年銘の銅版が發見されて居るし現に同年號の五輪石塔が立つて居る。地藏尊も大體此頃に埋められたものであらう。なほ加賀國笈岳の經塚よりは長さ二寸九分の木彫地藏尊を發掘してゐる。やはり足利時代の形式である。

合子には金屬製と磁器とがある。朝熊山經塚第一號經塚よりは金屬製の合子が出たといふが、その存在は今不詳である。多氣村漆經塚よりは青白磁の合子二個を出した。共に蓋を缺くが印籠蓋があつたと思はれる。其の一は身の高さ七分、口徑一寸三分で底は平直にして「國家合子記」と刻銘してある。其二も形式・大きさ其一と大體同じである。全面に淡青白色の釉藥をかけ、支那南方系宋窯の磁器である。(第四圖) 印籠蓋の合子は藤原時代並に鎌倉時代の經塚遺物に屢々見るところである。

水滴は硯と相伴つて經塚より屢々發見せられる。仙宮神社に傳つてゐるのは水滴のみであるが、恐らく硯と共に埋納せられたものであらう。此水滴は饅頭形の青銅製打物で高さ六分六厘、口徑六分、底徑一寸、注口の長五分あり、全面鍍金で魚子地に唐花文を毛彫にしてある。惜むらくは蓋及び蔓を缺いてゐる。(第三圖) 藤原時代の優秀なる製作で水滴としてかゝる形式はその例少く、僅に加賀國白山上野國邑樂郡坂田の各經塚より發見され、仙宮神社のものは此の後者に近い。

磬も仙宮神社に傳つてゐる。鑄鐵製片面素文、簡單ではあるが藤原時代の形式で幅五寸・高一寸八分・厚二分重量八十四匁五分ある。經塚より磬を出した例は少く他國では但馬國養父郡野村の經塚にあり鐵製である。經塚奉養として特に鐵で儀具を作つたものであらう。

錢貨は伊勢では多氣村漆の經塚より出た例がある。その種目は皇宋通寶政和通寶各一枚で何れも宋錢である。

武器を出したのは漆經塚のみで、刀及び槍が発見されてゐる。刀は腐蝕し鏽化して折損し原形及口數を明知し難い。勿論直刀式で身の幅廣く背も厚い。なかには刀身の先を曲けたものもあり、珍しく鐵製の鐔のついたものもある。(第四圖³) 鐔の經塚から出土した例は極めて稀で、京都市外鞍馬寺、備前國和氣郡英保村、駿河國愛鷹山麓の各經塚より發見されて何れも藤原時代乃至鎌倉時代初期に屬するものである。漆經塚の槍は一口で總長八寸一分、身の長さ七寸巾六分ある。從來經塚より槍を出した例も少く、僅に阿波國板野郡松島村泉谷、大和國吉野郡金峰山、紀伊國東牟婁郡那智山の三例があるに過ぎ

ない。

經塚と歴史

伊勢國に於ける經塚は經筒や經瓦、其他の伴出物に銘文の記載があつて、願文・施主や年號によつてその歴史を知ることが出来る。

此等の銘文によれば如法經を埋藏したことが分る。如法經とは一定の規則に従つて經文を書寫すること法華經が多い。朝熊山の經筒銘には「奉造立如法經龜壺口事」と云ひ、世義寺藏のそれには「奉施入如法經筒一口」と云ひ、丹生村神宮寺藏のそれには「奉施入如法經箱一」と銘してある。而して此風は長く續き、世義寺²⁸では毎年九月廿五日より卅日までの間、如法經とて書寫勤行あつて、その書寫した經を十月に永代山の經ヶ峰に夜中納められ此式を「どうび」と稱した。世義寺²⁹には如法經領の田嶋等があつて之に關する文龜・永祿・天正文祿・慶長・寛永の頃の古文書がある。朝熊山³⁰に於ては六月一日に山僧が絶頂經ヶ峰龍ヶ池に登つて結界し修法の場所としたので、此處では如法經を行つたか明でない。而して如法經の願

意は現世の或は自他皆共の利益を願ひ、又極樂往生を或は追善供養をなすの思想で藤原時代乃至は鎌倉時代の世相を物語つて居る。それが足利時代になると朝熊山經ヶ峰の銅板には「奉納法華妙典六十六部」「三十番神・羅刹女」「仙宮神社の經筒にも」「大乘妙典・十羅刹女・三十番神」と夫々銘記してある。即ち當時六十六部廻國納經の風があり、如法經の守護にも三十番神また鬼子母神並に其の眷屬と法華經とを誦するものを守護せんと誓へる十羅刹女が信仰せられた。此事は他國にも行はれ記銘によつて從來調査せられたるもの次の如し。

(經 塚 地 名)

(記銘遺物)

加賀國石川郡吉野谷村笈岳

經 筒

信濃國南佐久郡畑村大字畑

經 筒

甲斐國北巨摩郡大草村

經 筒

下野國下都賀郡家中村大字家中

紙本經奥書

羽前國南置賜郡窪田村

經 筒

なほ朝熊山經ヶ峰よりは土製地藏像を多く出し、足利時代に於ける地藏信仰が經塚に於ても窺ふことが出来るの

である。

さて此等の經塚を營んで利益を希ひ供養をなしたるは如何なる人々であるか。神宮鎮座の宇治山田市附近の經塚にあつては神宮の祠官度會氏、荒木田氏、大中臣氏等が之に關係してゐる。而して且過山菩提山發見の瓦經には殊に多數の名を連ねて居るのである。

朝熊山の經筒には伊勢大神宮權禰宣正四位下荒木田時盛及び散位度會宗常の名があり、且過山の瓦經には檀越度會常幸、女檀那度會氏子また度會神主常行の名があり菩提山の經瓦には大願法主は沙門西觀にして大檀越度會常幸同心檀越度會奉幸の名が見える。其他金剛佛子として印西・導西等の名がある。そして三河國渥美郡伊良期郡萬覺寺に於て書寫したと記してある。又丹生村神宮寺の經筒銘によれば僧禪仁の現世安穩後生善處の爲に鍛冶御蘭住人僧觀秀の造つたものである。以上神宮關係の僧俗の人が多い。佛に對する忌の嚴重であつた神宮祠官も藤原時代には佛教に歸依し如法經を行ひ度會氏荒木田氏の系譜によれば僧侶になつた人もかなりあつたのである。

經塚は密教に關係あるものであるが遺物とその歴史によれば石田氏は紙本經塚が天台宗を背景として起つたに對し瓦經塚は眞言宗によつて行はれたと云つてゐる。然るに伊勢に於てみるに菩提山神宮寺世義寺、朝熊山の金剛證寺、瓦經塚所在の且過山の威勝寺何れも眞言宗である。而して多氣村漆の經塚は側に近く吉神社があつて天台宗を背景としたものと思はれる。

次に足利時代になつては神宮關係といふ事は直接には認められないが朝熊山に於ては銅板によれば永正十年、大檀那天章如裕が法華妙典六十六部を奉納し、五輪石塔の銘によれば永正十七年に善玖禪門妙坤禪尼等が供養してゐる。仙宮神社の銅製經筒はその銘によつて大和國住快養上人が納めたものである。而して此等の人々は如何なる來歴があるかよく調べられてない。

伊勢の經塚は遺物の紀年銘によつてその建設年代の積極的に知られるものが多い。宮本村前山發掘經筒二器の一は無銘であるが他は、長寛元年と傳へられ、若し事實とすれば此經塚は伊勢では最も古いものである。また丹

生村神宮寺藏の經筒は承安二年の銘で、伊勢經塚遺物の紀年銘としては最も古いものであるが遺憾ながら其の發見地が不明である。次に紀年によつて遺蹟の確實なるを順次に擧ぐれば次の如し。

經 塚 地 名 紀 元 紀銘遺物

四鄉村朝熊山經ヶ峰 承安三年(二五年) 經筒

宇治山田市且過山 承安四年(二六年) 瓦經

四鄉村北中村菩提山 同 年 同

宮本村前山龜谷郷 治承二年(二六年) 經筒

即ち承安治承の頃のものが多く、他國に此頃の年代の經塚を求むるに岩代國に次の三ヶ所が群つてゐる。

岩瀬郡西袋村大字西川

伊達郡陸合村大字平澤

信夫郡飯坂町天王寺

此等何れも經筒銘によつて承安元年のものである。而して以上の次に位するものが多氣村漆經塚及多度神社の經塚でその遺物の年代を綜合して既に鎌倉時代に入つてからの營造であらう。

次に足利時代に入つて、朝熊山經ヶ峰に於ては銅板が永正十年（紀元二一七四年）、同處の五輪石塔が永正十七年（紀元二一八〇年）で永正年間のものが多い。他國に於て永正年間の著名なる經塚は加賀國石川郡吉野谷村笈岳の遺蹟で經筒銘によれば永正十五年である。

伊勢國の經塚は藤原時代末より足利時代にも及んで營まれた。朝熊山經ヶ峰の如きは藤原時代に創められてから足利時代にも同一地域に追納せられて一經塚地域が數百年に亘る永い生命を保つてゐるのは山城國鞍馬寺經塚等と共に注意すべきものである。

鍛冶御藪 住人 僧

觀秀造之

於我滅度後應受

持是經是人於佛

道決定无有疑願以

此功德普及於一切

我等與衆生皆共成

佛道

一、朝熊山出土經筒

金剛證寺藏

奉造 立

如法經龜壹口事

右志者爲現世後世安穩

太平也

承安三年癸巳八月十一日

伊勢大神宮權禰宣

正四位下荒木田神主時盛

散位渡會宗常

一、前山出土陶製經筒

世義寺藏

附記 伊勢國發見經筒銘及瓦經輿書

一、出土地不明陶製經筒

神宮寺藏

奉施 入

如法經箱一

右爲施入意趣僧

禪仁現世安穩後

生善處也

承安二年八月十八日

敬白

奉施入如法經筒一口

右志者爲教豪尊靈出離

生死頓證菩提施入如右敬白

治承二年七月十二日造之

願主僧 寬善

造手藤井成重

敬白

一、菩提山出土瓦經

御巫清白氏藏

僧相西尼如來尼歡喜入道尼妙法僧定宗尼佛種字清

四郎大養氏平氏平黑犬同小犬荒木田五郎子沙旋樂珍尼

妙法

藤原醫王丸伊勢太郎丸國栖五郎丸乙若丸僧行祐勇勢太郎

僧玄海平下野一志氏伴氏同氏同氏

承安四年歲次甲午七月

日於南閩浮提 大日本國東海道三

河國渥

美郡伊良期鄉萬覺寺釋迦末法時衆躰佛像衆菴

塔婆衆部妙典釋迦末法時以後百歲闍諍堅固比

奉造顯書寫畢 大願法主 沙門西觀

大檀越 度會常章 度會氏子 仙王愛子同瀧壽

同心檀越 度會春章 大中臣氏

同心助成施主 佐伯國親女大施主礮部氏員愛子等

同心助循筆師金剛佛子印西金剛佛子遼西僧

僧兼仁僧聖賢僧慶印僧教春僧長中入

同山一門徒衆僧長源藤内支地藏堂

僧聖心大中臣氏同定田尼上大中臣正長大中臣右見

一、且過山出土瓦經

考古界二の十二所載

(表)

持法華經者 意根淨若斯 雖未得無

是人持此經 安住希有地 爲一切衆

能以千萬種 善巧之語言 分別而演說

妙法蓮華經卷六

承安四年甲午五月庚午廿九日於南閩浮提日本國

東海道三河國渥美郡伊良期鄉

西觀之勸進釋迦末法之時妙法蓮華經

面如法奉書寫了 大勸進金剛佛子

檀越 度會常章

女檀那度會氏子

度會春章

助筆願主等僧良中悲母没

散位佐伯國親女弟子磁部

六卷十八

(裏)

員男女子等

佐伯清俊同常吉同四郎同五郎

同六郎同氏子如意同滿同犬子等

過去祖父祖母等

女弟子之養父沙彌妙寂養母紀氏

日親之親父三河友吉母島氏子

養父母坂本清黑物部氏乃至七世四恩

三河友安僧印西 法界衆生等

當御厨前領主度會神主常行

右以結緣書寫力如此等與有緣徒衆

淨土往生證光生法忍預佛記捌得

生來此界引導有緣人訪无緣者乃
界分身散影於一切衆生和光同塵下
至一切智地如彼普賢觀音等

法

① 考古學講座 經塚(石田茂作著)

② 勢陽五鈴遺響 度會郡塚山の條

神部名勝誌 天神山の條

③ 伊勢參宮名勝圖會 經ヶ峰の條

勢陽五鈴遺響 度會郡 經ヶ峰の條

神部名勝誌 尾部坂經ヶ峰の條

④ 考古學雜誌七の四 岩出齋三郎報

⑤ 伊勢參宮名勝圖會 世義寺の條

神部名勝誌 威徳院の條

⑥ 神部沿革資料目錄

⑦ 神部名勝誌 菩提山神宮寺趾の條

⑧ 考古學雜誌七の四 和田千吉報 岩出齋三郎報

⑨ 考古學講座 經塚

⑩ 考古學雜誌十三の十 大西源一報

⑪ 勢陽五鈴遺響 桑名郡多度神社の條

⑫ 考古學雜誌九の十 鈴木嘉昭報

⑬ 考古學雜誌七の四 岩出齋三郎報

⑭ 久留春三、三村清三郎、喜田川要三郎、岩出齋三郎等藏

- ⑮ 考古學講座 經塚
- ⑯ 和田千吉氏、藏播磨常福寺瓦經
- ⑰ 伊勢參宮名所圖會
大日本金石史（木崎愛吉著）
- ⑱ 和田千吉藏
- ⑲ 大藤鎮太郎藏
- ⑳ 神宮文庫藏
- ㉑ 黒水鈔
- ㉒ 考古學講座 經塚
- ㉓ 神宮徴古館藏
- ㉔ 考古學講座經塚
- ㉕ 鞍馬寺經塚遺寶
- ㉖ 勢陽五鈴遺響 桑名郡多度神社の條
- ㉗ 考古學雜誌十四の一 井上頼文報
- ㉘ 神領歴代記 卷上

神郡名勝誌 經ヶ峰の條
山田三方會合記錄

- ⑳ 勢陽五鈴遺響 朝熊山經ヶ峰の條
- ㉑ 後藤氏年表 山梨縣檜崎矢兵衛藏
考古界五の六 高橋健自報
- ㉒ 考古界二の十二 和田千吉報
伊藤富三郎藏
- ㉓ 御巫清白藏
- ㉔ 金剛證寺 現在は臨濟宗東福寺派なり
- ㉕ 威勝寺 本尊不動明王 眞言宗大覺寺派なりしが現在は廢滅す
- ㉖ 日吉神社 現在は別格官幣社北畠神社の攝社に合祀す
- ㉗ 大日本金石史（木崎愛吉著）
- ㉘ 東京帝室博物館藏